

5月25日(金) 10:00~10:40 九州大学50周年記念講堂

禅林寺所蔵山越阿弥陀図について

広島大学 高間 由香里
TAKAMA Yukari

禅林寺の国宝山越阿弥陀図は、画面に向かって左上に阿字を置く特異な図様から、密厳浄土を標榜する覺鑊流念佛の大成者である静遍（1166～1224）所縁の遺例とされ、また、制作年代はその在世中から13世紀中頃まで諸説行われている。

しかし、本図の伝統的な大和絵で表された山水風景では、丸く重なるように描かれた山並や、笠状に墨でぼかした遠景の樹木、朱と白の葉をつける特徴的な闊葉樹、硬めの墨線で整然と描かれた波などが正安元年（1299）の一遍上人絵伝と相通じ、本図の制作が13世紀第4四半期に降ることを示している。禅林寺は静遍、証空、淨音（1201～1271）と続いた後しばらく寺運衰退し、本図の制作と禅林寺とは必ずしも直結させなくともよからう。

そこで尊像表現を見ると、例えば阿弥陀の弧状に表された裳の上縁が三室戸寺所蔵乾闥婆像（童子經曼荼羅）中の如来形に見られ、また四天王の腰甲中に腹部前立ての一部を収める型式が、台湾故宮博物院所蔵千手千眼觀音図の乾闥婆像と共通するなど、随所に南宋画の強い影響が認められる。

また本図の阿弥陀は、僧祇支の上から袈裟を偏袒右肩に纏い、左胸前の環にその先端を通すが、管見の限りこうした服制は播磨淨土寺淨土堂本尊阿弥陀三尊立像の中尊を嚆矢とする。また四天王のうち、一、二尊は兜を被るのが一般的であるにも拘らず、本図の場合には四尊全てが宝冠を戴いて宝髻を見せており、肩甲の先端が鋭く尖ったりしているが、これらの特徴は胡宮神社や播磨淨土寺に伝来する銅製五輪塔の内廓地輪線刻画四天王像にも認められる。周知のとおり、淨土堂本尊のもとは重源請來図様であり、二基の五輪塔はいずれも覺鑊の思想に傾倒した重源が制作させたものである。

さらに、来迎図中に幡が描かれる最古の遺例は有志八幡講十八箇院所蔵阿弥陀聖衆來迎図であるが、有志本で幡を持つのは菩薩である。すると持幡童子の初出は、法華寺所蔵阿弥陀三尊及び童子像となるが、この図も重源による法華寺復興の一環として拵えられた可能性が指摘されている。『南無阿弥陀仏作善集』を参考すれば、重源の迎講には多くの天童が登場しており、持幡菩薩から持幡童子への転換にも重源の関与が推測されるのである。

こうした傾向のなか、阿弥陀の袈裟の環や持国天の宝冠などには顕著な写し崩れも認められ、本図を南宋画の直模とすることは難しい。

以上のことから本発表では、本図が覺鑊流念佛の影響下にあってしかも南宋様式を積極的に受容した重源の発案原本に、13世紀第4四半期頃、身近で緩やかな日本の山水風景を重ね合わせた、極めて特色ある来迎図であることを主張したい。即身成仏を標榜しつつも阿弥陀との間に山並という距離を敢えて置く構図には、その頃急速に伸張する専修念佛との融合が窺われる。制作の機縁に、真言僧ながら下根の順次往生を説く頼瑜（1226～1304）の信仰を想定できるかも知れない。